

第1分科会 特別支援教育コーディネーターの役割

個別支援を学校全体の学びへつなぐ 特別支援教育コーディネーターの役割

新潟県村上市立さんぽく小学校 教諭 永井祐里恵

不登校傾向にあるA児への支援を通した、コーディネーターの役割の再構築

本校について

村上市立さんぽく小学校



☆全校児童 101名
(特別支援学級在籍児童 17名)
(通級指導教室利用児童 10名)

☆県内最北に位置する小学校

☆村上市街地から車で約40分

I 実践にあたって

令和7年7月の教育課程部会では、次期学習指導要領に向けて、多様な学びを支える学校づくり、通常の学びと通級による指導との連続性、特別支援コーディネーターの役割強化などが示された。

問い

「一人の子どもの支援を、学校全体への教育力へとどう転換するか」

不登校傾向にあるA児への支援を通して、コーディネーターの役割を再構築することを目指した。

対象:A児(2年生1学期～5年生1学期)

A児の実態

① 2年生の1～2学期 — 「書き」の困難への気づきと診断

担任の気づき

「書き」に苦手さ(書き順、独特な字形、漢字が覚えられない)が見られ、学習障害があるのではないかと考えた。



個別懇談で共有

個別懇談の場で、A児の様子と担任の見立てを母に伝えた。



受診・診断

医療機関を受診し、「自閉スペクトラム症(軽度)」「注意欠如多動症(軽度)」の診断を受けて服薬を始めた。

その後…

「書くこと」への苦手意識が、学習面だけでなく登校そのもののへの負担につながっていった。

A児の実態

② 2年生の1月下旬～ ― 登校渋りの表れと初期対応

本人があげた理由

「宿題をするのが嫌」
「書くのが嫌」

「書くこと」に対する苦手意識を理由にあげ、1月下旬から登校渋りの症状が続いた。

学校の対応

気持ちを整えてから学級へ

朝、2年教室にランドセルを置き、1・2限は特別支援学級で気持ちを整えてから学級に戻る。

書く量の調整

宿題や授業で書く量を調整し、「書くこと」への負担を減らす配慮を行った。

→ 対応後、1週目は順調に登校することができた。

A児の実態

③ 2年生の1月下旬～ 2週目以降 — 経過の変化と検査結果

2週目の月曜 朝

腹痛で休みたいという症状が見られるようになった。

そこから

遅刻や欠席が増えていった。

登校しても

国語や算数の授業を避けるようになっていった。

WISC・K-ABCの結果を受けた医師の所見

「全体の数値は高いが、ふり幅が激しいため、学習の困難さは大きい」

→ 語彙尺度は高く、書き尺度が低い。

A児の実態

④ 3年生の4月時点の個別の教育支援計画

優先度の高い課題

実態	その背景
国語や算数の授業に参加することができない。 不安を強く感じると、体調不良(腹痛、吐き気)を訴え、登校することができない。	正しい字形や書き順で書くことに困難さがあったり、繰り返し練習したりすることに抵抗感があったりする。 初めて行うことや、苦手なことを繰り返し行うことに不安を感じ、その思いや考えを言葉で伝えることができない。

目標

長期目標(年度末の姿)

- 1～5時間目を学校で過ごし、半分以上の時間を3年教室で過ごすことができる。
- 自分の思いや考えを正しく伝えるための方法を身に付ける。

A児の実態

④ 3年生の4月時点の個別の教育支援計画

具体的な指導内容と手立て

具体的な指導内容	手立て	
	場面(支援者)	指導方法
書きやすいマス目や自分に適した課題量を選択・確認し、負担感なく書字課題を行う。	3年教室 (担任)	ノートのマスの大きさや、書く文量、課題の量や内容等を調整する。
予定表や事前説明等で今後の予定や活動手順を把握し、不安を和らげながら落ち着いて行動する。	通級指導教室 (担当)	学習や行事の予定を、前日や当日の朝にあらかじめ伝える。
困ったときや不安になった際、あらかじめ確認した対処方法を活用し、自分なりのやり方で気持ちを調整する。	通級指導教室 (担当)	困ったときや不安になったときの対処方法(相手への伝え方や呼吸の整え方)と一緒に考え、実践する。
教師とともに学習内容を確認し、自分に合ったペースや課題に見通しをもって取り組む。	教務室 (教頭)	学習の進み具合と一緒に確認し、苦手なところの復習をする。

Ⅱ 実践内容の全体像

3年生1学期 ～ 5年生1学期

1

校内資源をつなぐ

チーム学校の構築と
「校内資源」の最適化

2

子どもの学びを
デザインする

C(評価)・
A(改善)に
重点を置いたPDCA

3

学校と家庭・地域を
つなぐ

外部機関および家庭との
パートナーシップの構築

4

個別支援を
学校全体へ広げる

校内全体の
「UD化」の推進

1

校内資源をつなぐ（3年生）

チーム学校の構築と「校内資源」の最適化

A児を学校全体で支える体制を機能させるため、校内支援委員会を開き、方向性や役割分担を協議・決定した。

担任

A児の負担を軽減するために、宿題や書く量を調整。学習への成功体験づくり。
A児を受け入れる学級の雰囲気づくり。

通級指導担当

通級指導教室で心を整えてから学級に入れるように支える。つまずき分析と個別の配慮や支援。

教頭

登校時の受け入れ、不登校が続いたときの家庭訪問、学習端末を生かした学びの保障。





教頭と一緒に書き初め

A児の実態

⑤ 4年生1学期～

3年生時に受診した際の医師の所見

個別の支援が必要と判断する。

なお、学習の進度に関しては、通常の進度と同様のペースを保つことが望まれる。

→ 4年生進級時に特別支援学級への転籍が決定。

2

子どもの学びをデザインする（4・5年生）

C(評価)・A(改善)に重点を置いたPDCAサイクルの構築

○ 効果があった取組

「1対1で関わる時間を確保したこと」「学習のメインをICT端末の活用(AIドリル、音声入力)と量から質(選択制)への転換」により、不登校傾向が次第に改善していった。

△ 見えてきた課題

1対1の時間が確保できないときは、途中帰宅していた。また、一部の職員に負担の偏りも見られた。



改善

村上市教育支援センターの職員が来校し、1対1の時間を安定的に確保。

→ 途中帰宅がなくなり、職員の負担も軽減した。

A児の実態

⑥ 4年生の4月時点の個別の教育支援計画

優先度の高い課題

実態	その背景
1対1で関わるできないと迎えを呼び、途中帰宅してしまう。	一緒に過ごせる大人がいないと、不安になったり、退屈になったりしてしまう。

目標

長期目標(年度末の姿)
○ 1～4時間目まで学校で過ごすことができる。

A児の実態

⑥ 4年生の4月時点の個別の教育支援計画

具体的な指導内容と手立て

具体的な指導内容	手立て	
	場面(支援者)	指導方法
自分の興味・関心のある事柄やICT端末等を活用し、見通しをもって主体的に学習課題に取り組む。	教務室(教頭) 特別支援学級 (担任)	本人の興味・関心のある事柄から学習に繋げたり、ICT端末等を活用したりする。
事前に活動内容や一緒に過ごす大人を確認し、見通しをもって安心して活動に参加する。	教務室(教頭) 特別支援学級 (担任)	活動内容や一緒に過ごすことができる大人を事前に伝え、本人が安心できる環境を整える。
自分に合った細分化された目標を一つずつ達成し、安定して登校・滞在できるようにする。	特別支援学級 (担任)	目標を細かく分け、簡単な目標から少しずつ取り組んでいく。
トークンを活用して、自身の取組や成果を視覚的に確認し、達成感を味わいながら自己を肯定的に捉える。	特別支援学級 (担任)	トークンを活用し、本人の頑張りを認め、達成感を味わえるようにする。



A児の興味を生かした学習指導

①車のせいさん国をしらべる。

- ・フェラーリ どこの国の車
- ・BMW どこの国の車
- ・メルセデス・ベンツ
- ・ロールス・ロイス
- ・レクサス
- ・アウディ

でけんこ。以下、同じしらべるでOK。

②ねだんの高い車をしらべる。

「高きやう車」 ~~ねだん~~ ねだん ランキング

まとめ

フェラーリ ... イタリア

・BMW ... ドイツ

・メルセデス・ベンツ ... ドイツ

・ロールスロイス ... イギリス

・レクサス ... 日本

・アウディ ... ドイツ

5/14

いちばん高い車の
ねだん

47おく 円

いちばん安い

20万 円



「安心して関われる職員」を増やしていった

3

学校と家庭・地域をつなぐ

外部機関および家庭とのパートナーシップの構築

複雑に絡み合う課題を解決するため、学校の外部との連携を図った。

保護者

「学校と家庭で、A児の『安心』
をどうつくるか」という共通の
課題を設定

医療機関

専門的な知見を
校内にフィードバック

学童保育所

情報共有を行い、
支援の一貫性を確保

学校
(コーディネーター)

A児

子育て支援機関 (NPO法人)

地域の子育て支援と
連携し家庭を支える

4

個別支援を学校全体へ広げる

校内全体の「UD(ユニバーサルデザイン)化」の推進

A児に対する合理的配慮を、学級・学校全体の学びの質を向上させる契機として捉え直した。

「A児にとっての必要な配慮は、他の児童にとっても分かりやすい」

という意識を校内に広めた

1

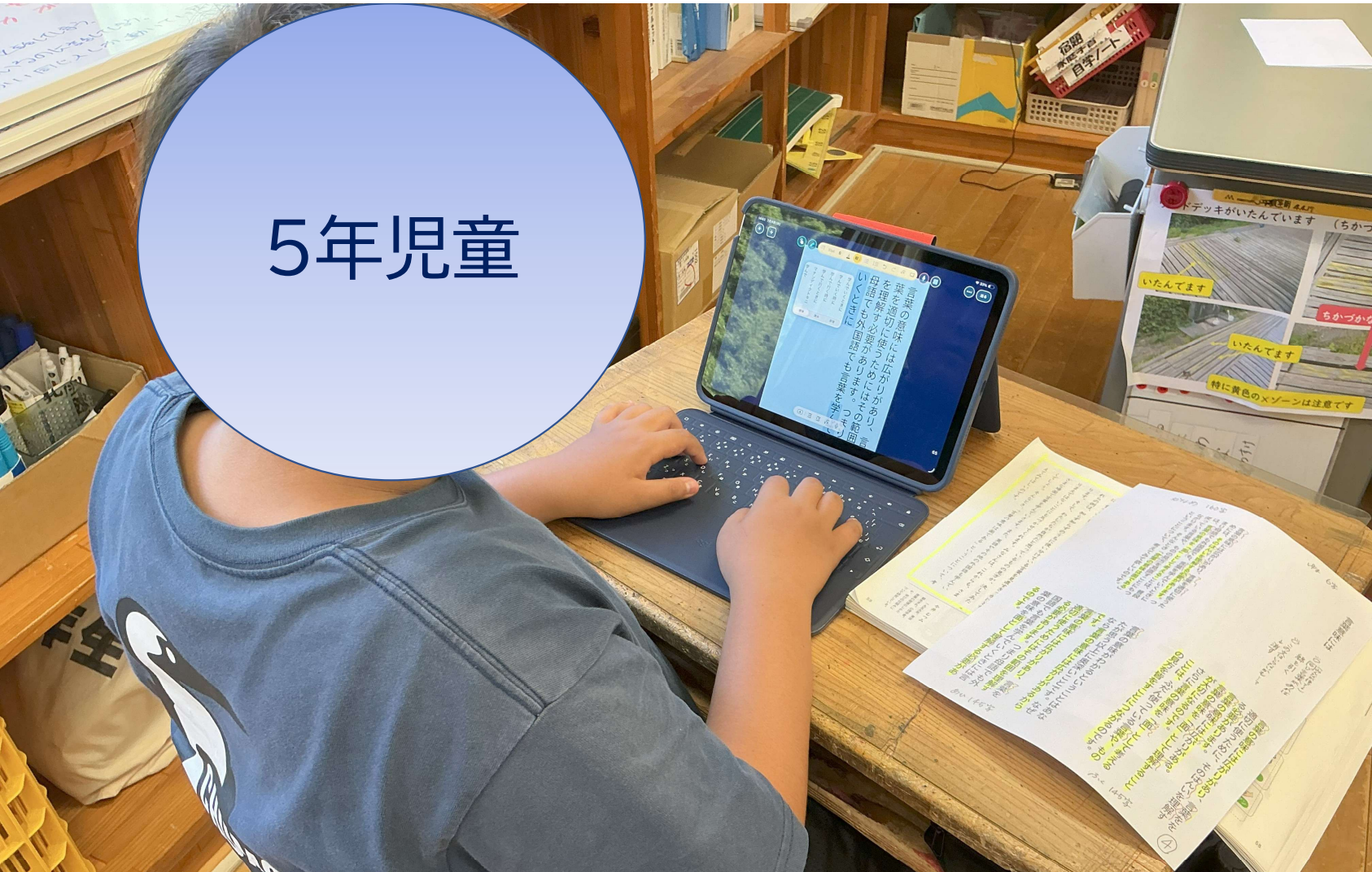
ICT活用の日常化

AIドリルや音声入力などのICTの活用を日常化し、課題に取り組む方法を全員が選択できるようにした。

2

職員研修等での啓発

特別支援教育を「特別」な教育にしない学級・学校づくりを、職員研修等を通じて校内に広めた。



5年児童

A photograph of a 5-year-old child sitting at a wooden desk, viewed from behind. The child is wearing a blue t-shirt with a white graphic. They are using a tablet computer with a blue keyboard. The tablet screen displays a Japanese text-based interface. On the desk, there are several papers with Japanese text and some yellow sticky notes. In the background, there are wooden shelves with various items, including books and boxes. A blue circular overlay with the text '5年児童' is positioned over the child's head.

ICT端末を活用し、取り組む方法を一人ひとりが選択



The Great and "FUTSU" Questions for Humanity Begin!

ふつうの
じかん



これが解けたら
世界が変わる？
未来が変わる？
人類の大問題。
「ふつうって、何ですか？」
大人も、子どもも、
みんなで考えよう。
よい、はじめ！

「ふつうのじかん」を活用した研修

Ⅲ 成果と課題

○ 成果

教育支援センターの活用や教職員の役割分担による組織的な支援体制を確立し、ICTを用いた学習デザインや外部機関との連携を推進したことで、A児への合理的配慮をA児だけの支援に終わらせず、学級全体や学校全体のUDへと発展させ、校内全体の教育力を高めることができた。

△ 今後の課題

「個別最適な学びと協働的な学びを更に往還させる仕組み」や「通常の学びと通級や特別支援学級による指導との連続性を一層高めるマネジメントの在り方」の確立が求められる。